

北川とも

TOMO KITAGAWA • PRESENTS

高緒拾

HIROI TAKAO • ILLUSTRATION

欲深、純情

An illustration by Hiroi Takao showing a man and a woman in a close embrace. The man, on the left, has dark hair and is wearing a black jacket over a light blue shirt. He is looking towards the woman with a slight smile. The woman, on the right, has short brown hair and is shirtless, with her back to the viewer. She is looking back at the man. The background shows a cityscape with buildings and a purple sky. The title '欲深、純情' is written in large, stylized, red and white characters across the middle of the image.

「……ただのキスだつていつの間に、感じるもんだな」ひっそりと秀島が洩らして、唇だけの笑みを浮かべる。荒々しく首筋に唇が這わされ、いつになく執拗に肌を吸われる。明日は会社があり、さすがにいくつも跡をつけられるのはまずいと考えたが、言葉となつて出てこなかった。



欲深い純情

《立読み版》

北川 とも

イラスト 高緒 拾

意味ありげに笑う男に促され、ホテルの部屋に足を踏み入れた三浦昌成は、目に入ったダブルベッドを見て、思わず立ち尽くしていた。

狭いのは嫌だといって、一人でもダブルの部屋を取る人間はいるだろうが、相手が相手だけに、意識せずにはいられない。

先を歩く長身の男の広い背に、思わず昌成は声をかけていた。

「……秀島さん……」

振り返った男は、おどけたように肩をすくめて笑う。

「なんだ、もうわかったのか。俺の正体が。前にお前と顔を合わせてた頃とは、ずいぶんイメージを変えたつもりだったんだがな」

戸惑う昌成にかまわず、秀島はサイドテーブルに歩み寄ると、すぐに受話器を取り上げた。

所在なくその場に立ち尽くす昌成は、もう一度ダブルベッドにそっと視線をやる。秀島と二人きりでいて意識するのもおかしいのだが、やけに生々しさを感じる。

視線を感じて顔を上げると、受話器を耳に当てた秀島が何かを企んでいるような表情で昌成を見つめていた。戯れに獲物を狙う肉食獣を連想させる、したたかな眼差しから逃れるように昌成が顔を背ける

と、受話器を置いた秀島に声をかけられる。

「そこに座ってろ。コーヒーを頼んだから」

言われるまま窓際に置かれたソファに腰掛ける。空調はよく利いていて室内は涼しいのに、肌が汗ばむ。昌成はハンカチを首筋に当てながら、窓の向こうに広がる夜景にぎこちなく視線を向ける。

「――昼間、俺が言ったことの答えは出せたか」

悠然とした動作で正面に腰掛けた秀島に言われ、軽く肩を震わせる。

昼間会ったときは秀島の様子はまったく違い、正直戸惑わされる。今の秀島は、ジーンパンに黒のポロシャツという格好だけは同じだが、髪は短く整えられ、野性味を一際醸し出していた無精ひげもきれいに剃られている。

秀島の顔に見入っていた昌成は、我に返って言葉を洩らす。

「……答えて……」

「本社に返り咲きたくはないか、と聞いただろ」

即答は危険だった。秀島が仕掛けた罠にかかり、抜け出せなくなりそうだ。

「なぜおれに、そんなことを？ 秀島さんは『こうけんつうしんしゃ広研通信社』に復帰されたばかりだと聞きました。そん

な人が、わざわざこんな地方にまで来て、おれを訪ねるなんておかしいです」

「復帰したばかりだからだ。俺はアメリカでの生活が長すぎて、日本での味方は少ないんだ。何かをやるにしても、まずは人材だろ。信頼のおける、優秀な人材——」

「……おれが、それだと？」

「優秀という点については申し分がない。向こうにいても、俺は常に情報は収集していた。お前の評判は聞いている。まじめで勤勉で、仕事の処理能力は完璧に近くて速い。才能については、あの墨田が脅威を感じて、自分の側どころか本社から追い出したくらいのもを持つてる」

思わず昌成は、秀島を睨みつける。秀島はそんな昌成の眼差しに心地よさを覚えたように、すつと目を細めた。

「その目はするなと言っただろ。しなくていいものを、刺激することになるぞ」

昌成が身じろいだとき、ドアがノックされる。対応に出た秀島は、すぐにトレーを手に戻ってきて、昌成の前にコーヒーカップを置いた。

「——お前に、嫌という権利はないぞ」

ミルクを入れたコーヒーに口をつけたところで秀島が言う。昌成は乱暴にカップを置いていた。

「どういう意味です？」

「俺が会社に戻る条件にした。チームを組むときは、必ず三浦昌成をプランナーとして入れろと」

「どうして、そんな勝手なことっ……」

「墨田に復讐したくないか」

皮肉っぽい光をたたえた目が昌成を見据えてくる。息を呑んだ昌成は、結局自分から、危険な部分に踏み込むしかなかった。

「……知っているんですか？ おれと、墨田さんのこと」

「お前がコピーライター時代から二年前まで、同じチームのディレクターだった墨田と寝ていた、ということか？」

あからさまな言葉に昌成の頬は熱くなる。つい非難の目を向けると、秀島は鼻先で冷たく笑った。

「恋愛関係にあった、とでも表現すればよかったか？ ふん、やってることは同じだろうが。それに墨田は、お前をあつさり切り捨てた。そんな奴との関係で言葉を飾っても、仕方ないだろ」

そうだ、と昌成は心の中で、秀島の言葉の正しさを認める。自分は墨田に切り捨てられた存在なのだ、と。この二年間、心の中には常に、墨田への呪詛じゆそが満ちていた。

「……目の色が変わったな」

ソファから身を乗り出した秀島が顔を覗き込んでくる。ハツとして昌成は顔を背けようとしたが、それより早くあごを掴み上げられた。その瞬間、電気にも似た感覚が体の中を駆け抜けていく。

「これではつきりした。お前は、墨田を忘れちゃいない。憎いんだろ？」

「関係、ない……。あなたには、おれと墨田さんのことは関係ないはずです」

「あいにくだな。俺は墨田が嫌いだし、墨田のほうも俺を嫌ってる。できることなら、あいつを今の立場から蹴落としたいと思ってる。——俺とお前は、最高のパートナーになれる」

この男に捕まってはダメだという一心であごにかかった手を払いのけ、昌成は立ち上がる。

「今日はこれで失礼します」

足早に秀島の前から立ち去ろうとしたが、背後から腕を掴まれて動けなくなる。すぐ耳元で、太く艶のある声が残酷に囁いた。

「——このまま帰すわけないだろ」

ふっと体が浮き上がり、上下の感覚がおかしくなる。本能的に体をよじってみると、がっしりとした秀島の腕に抱き上げられていた。

「何っ……」

「お前が墨田としていたことを、俺がしてやる。墨田がそうやってお前を繋ぎとめていたんなら、俺も見習わないとな。これから、パートナーになるんだから」

乱暴にダブルベッドに放り出されて、昌成はすぐに体を起こして後退ろうとする。だがすかさず片足を掴まれて引き寄せられ、秀島もベッドに乗り上がってくる。

秀島がダブルの部屋を取った理由が、この瞬間はつきりした。最初から、このつもりだったのだ。

秀島が危険な男であるのは、昼間会社で会ったときからわかっていたはずだ。それでもこうして部屋を訪ねた自分のうかつさを、昌成は悔やまずにはいられない。

だが、会わずにはいられなかったのだ。秀島が目の前に現れたタイミングは、あまりによすぎた。

のしかかってくる秀島の重みに呻きながら昌成は、肉食獣のようなこの男と『再会』した今日の出来事を思い返していた。

※続きは製品版でお楽しみ下さい。

欲深い純情

《立読み版》

発行日 2012年5月18日

著者名 北川 とも

イラスト 高緒 拾

発行所 【MILK-CROWN】

株式会社水晶院

<http://www.milk-crown.net/>

(C) Tomo Kitagawa 2012

※本著作物の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。